

障害児保育における保育記録の検討

— 「学びの物語」と「ABC記録法」に対する保育者の意識から —

*¹新潟青陵大学*²帝京科学大学齊藤 勇紀*¹・吉川 和幸*²

要 旨

本研究は、障害児保育における子どもの記録の在り方についての検討を行った。社会文化的視点の「学びの物語」と行動論的視点の「ABC記録法」に対する保育者の意識を明らかにした。保育者6名を対象として、フォーカス・グループ・インタビュー（FGI）を実施し、得られた逐語録をSteps for Coding and Theorization（SCAT）によって分析した。

その結果、「学びの物語」は、子どもの学びの過程を把握するために有効な記録であり、「ABC記録法」は、障害のある子どもが快適に生活するための人的・環境的配慮、情緒的に安定して過ごすための保育者の援助を検討する視点を含んだ記録であることが明らかとなった。一方、双方の記録の共通点として、子育て支援、子育て相談に関すること、保育者の力量形成に活用できると捉えていたことが明らかとなった。上記の知見を踏まえ、今後は、障害のある子どもの幼児期の学びに即した具体的な記録の様式と子ども理解のための記録の在り方を検討していく必要がある。

【Key words】 障害児保育、保育記録、学びの物語、ABC記録法

I. 問題と目的

幼児教育施設では、障害のある子どもに対する個別の指導計画の作成と活用が求められている。一方、その作成方法や障害のある子どもの姿をどのように捉えるのか、子ども理解のための記録の方法や在り方についての詳細は明確になっていない。

先行研究では、個別の指導計画において設定される目標が、日常生活技能や対人関係に関する内容に偏重しており、遊びを通して示す子どもの興味、関心に、保育者が着目しづらい状況が生じていることが示されている¹⁾。

同様に、松井ら²⁾は、健常の子どもと比較して特定の行動が「できる/できない」、集団に「適応できる/適応できない」という二項対立的な見方ではなく、「まなざしの問い直し」についての議論が必要であることを指摘している。このような二項対立的なまなざしを克服するために、吉川ら³⁾は、子どもの姿を社会文化的視点から捉える「学びの物語」による保育実践の効果を示してい

る。そして、「学びの構え」を手掛かりとした記録は、子どもが保育環境へと主体的に参加していく実践を構想するために重要であることを示唆している。

一方、保育所保育指針解説⁴⁾では、障害のある子どもの課題が生じやすい場面や状況、その理由の分析により、場面に適した行動などの具体的な目標設定の必要性が明示されている。このような、子どもの実態を客観的に把握するための記録の方法として障害特性論、行動論的視点である応用行動分析学による実践のエビデンスが蓄積されている⁵⁾⁶⁾。応用行動分析学⁷⁾は、行動と環境との相互作用のアセスメントや支援方法の立案のために「ABC記録法」⁷⁾により記録が行われる。これまでも、「ABC記録法」の活用は、保育における子どもの合理的配慮や保育者に求められる支援の発見、保育者間の伝達の促進に対する効果が得られている⁸⁾。

このように、障害のある子どもの保育には様々な種類の記録が用いられているが、一つの視点ではなく、様々な視点に基づく記録により、包括的に子どもの姿を捉え

ていく必要があると考えられる。

以上のような問題意識から、本研究では、障害のある子どもの発達を捉える着眼点が整備されている「学びの物語」と行動論的視点を実装した応用行動分析学に基づく「ABC記録法」のそれぞれの記録に対する保育者の意識を明らかにする。そして、障害児保育における子どもの記録の在り方に対する示唆を得ることを目的とした。

II. 対象と方法

1. 研究対象者

保育施設に正規職員として勤務する保育者6名（保育者経験平均年数23.3年，SD =5.3，障害児保育の担任経験平均年数10.8年，SD =4.6）を対象とした。対象者の選定条件は、①正規保育者として複数年の勤務経験があること、②障害児保育の実践経験者であること、③個別の指導計画の作成経験を有することとした。対象者は、上記の条件を満たす保育者であり、インタビューにおいて、意見を表現しやすい関係が構築されている保育者を選定した。

すべての対象者は、「応用行動分析学」の研修会に参加済みで、保育実践で活用した経験をもっていた。また、3名は、実施日より以前に「学びの物語」についての研修を受講していた。一方、保育実践で活用した経験はなかった。対象者の概要を表1に示した。

表1 参加者の概要

	保育者経験年数	障害児保育担任経験年数	学びの物語の講義受講の有無	学びの物語の実践経験の有無	ABC記録法の講義受講の有無	ABC記録法の実践経験の有無
A	24	10	無	無	有	有
B	25	12	無	無	有	有
C	28	10	有	無	有	有
D	27	12	有	無	有	有
E	12	8	有	無	有	有
F	24	5	無	無	有	有

表2 「学びの物語」と「ABC記録法」の講義の内容

「学びの物語」の講義内容	「ABC記録法」の講義内容
1. 「学びの物語」の概要	1. 子どもの行動の定義
2. 「信頼モデル」による子どもの捉え	2. ABC分析と行動の意味理解
3. 「学びの物語」の記録方法	3. 記録に基づく目標設定と援助方法
4. 「学びの物語」による実践の評価	4. 行動の評価

2. 研究全体の流れ

1) 記録に関する講義の実施

対象者に対して、第2著者が「学びの物語」、第1著者が「ABC記録法」に基づく保育記録の概要について、それぞれ30分間の講義を行った。講義の概要を表2に示した。

2) 調査方法

2019年7月に、上記6名の対象者に対して、第1著者が所属する大学の講義室で実施した。第1著者が司会者、第2著者が副司会者となり、「障害児保育において双方の記録はどのように活用できるか」といった内容を主題としてフォーカス・グループ・インタビュー（以下、FGI）を行った。FGIのおおよその実施時間は60分であった。

3) データ分析の方法

FGIにおける保育者の語りはすべてICレコーダーに録音し、終了後に速やかに逐語録を作成した。逐語録はSteps for Coding and Theorization (SCAT)⁹⁾¹⁰⁾を用いて分析を行った。

その後、SCATから抽出された双方の記録に対する構成概念について、第1著者と臨床心理学を専門とする大学教員の2名が独立して、類似したカテゴリーに分ける作業を行った。その後、双方が合議しながら、サブカテゴリー、カテゴリーとして分類・命名し、双方の記録に

対する保育者の意識の特徴を抽出した。作成されたカテゴリと構成概念については、第2著者が内容を確認し、合意を得た上で、作図を行った。

4) 倫理的配慮

研究対象者には、研究の趣旨や方法、個人情報とプライバシーの保護、研究協力への自由意思と協力の撤回の自由について口頭と文章で説明し、本研究への同意を得た。なお、本研究は新潟青陵大学研究倫理審査の承認を得て実施した（承認番号：201901）。

Ⅲ. 結 果

SCATによる分析で示された6名の保育者から得られた「学びの物語」と「ABC記録法」の記録について、保育者の意識に対するストーリー・ラインを示した。なお、下線部分はテーマ・構成概念を示した。

1. 「学びの物語」の記録の活用に関するストーリー・ライン

〈保育者A〉

保育者間の対話と交流による経験知の伝達が可能ではないか。5つの明確な視点による子ども理解ができ、曖昧で不確実な姿からの捉えや主体性に対する細かな見取りが可能である。子どもの特性も伝わり、個に応じた育ちの尊重と仲間関係の援助が可能である。良い、悪いといった特定の行動にとらわれない子どもの姿に対して、保育者の個人の見方の尊重ができ、保育者の感じ方から、具体的な思考を促す記録である。

〈保育者B〉

若手保育者の振り返りと力量形成のために活用が可能である。この記録により、保育者間の対話での情報共有が可能である。保護者に見せたい記録なので、子育て支援への活用期待できる。

〈保育者C〉

場面にとらわれない子ども理解が可能である。明確な視点による子ども理解ができ、保護者と一緒に子どもの姿を共有する子育て支援への活用が可能である。先輩保育者との対話による保育観の共有、子育て支援を行う保育者の力量、特に連絡帳への活用ができると考える。また、計画に対する目標の達成状況を確認できるので自己評価の視覚化により、達成感を味わえる。

〈保育者D〉

保育者同士の価値観、子ども観の共有ができ対話による同僚の成長を望むことができる。気になる子どもだけではなく全ての子どもの視線や目線からの子ども理解を

促し、自分の保育を振り返ることができる。保育実践の意味の問い直しができる。

〈保育者E〉

特定の場面ではなく、場面にとらわれない子どもの見方が可能である。この記録は、新たな見方による力量形成の取組みに活用できる。個の発達を重視しながら、他者との関わりといった個と集団の育ちの尊重ができる。写真からは、子どもの内面と意思の理解、興味関心を捉える視点をもつことができる。

〈保育者F〉

嬉しい、喜び、笑うなどの気持ちの表れを捉える視点、できなかったことができたといった適応支援の視点、やさしくできたとか友だちとかかわっている仲間関係を捉える視点をきりとりたい。

2. 「ABC記録法」の記録の活用に関するストーリー・ライン

〈保育者A〉

客観視による力量形成が培われる。生活のなかの集団適応の支援を重視するため、保育者同士の協働による多面的理解が可能である。子どもの特性の把握や、協働による意思統一が図られ、特に低年齢児の行動、一斉保育による活用、パターン化している行動に対しての援助方法の検討が行われている。

問題行動だけではなく、肯定的な行動へのまなごしをもち、保育者の気づきを助長することから、省察の手段として、特に若手保育者の力量形成に適している。

〈保育者B〉

行動のきっかけへの援助を行うことで、部屋から飛び出すなどの行動がなくなった。年齢によって見方が難しく、発達年齢による行動の違いに対する理解が難しくと感じる。

〈保育者C〉

気になる行動の頻度から、回数が測定できる行動を調べている。行動への対応を職員同士で話し合うため、保育者間の連携が促進される。その結果、関わりについて共有することができるので、保育者の情緒的支援につながり、情報共有による信頼関係をもたらず。子どもの感覚の過敏性を発見したことや、養育者との子育て相談として活用している。

〈保育者D〉

研修会で学んだものを実践にいかすため、課題解決の糸口のきっかけをつかんでいる。記録をすることで、視覚化記録による課題解決が図られる。

〈保育者E〉

幼児期は、環境移行に伴う行動範囲が拡大する時期である。幼児クラスに比べ、乳児の行動は明確で、低年齢児の保育に活用しやすいと感じる。

〈保育者F〉

気になる行動に対する低年齢児の行動理解に役立ち、複数職員で活用ができる。子どもの課題となっている行動に対して、VTR記録を基に保護者との共有を行ったことがある。

3. 双方の記録の構成概念の分析

「学びの物語」は、「実態把握」、「援助」、「振り返り」の3つのカテゴリーに分類された。それが、さらに7つのサブカテゴリーに分類された。「実態把握」のカテゴリーは、「子どもの意欲・内面の理解」「子どもの姿の焦点化」「限定されない場面や行動」の3つのサブカテ

グリーであった。「援助」のカテゴリーは、「個と集団の育ち」「子育て支援」の2つのサブカテゴリーであった。「振り返り」のカテゴリーは、「主体的な力量形成」「対話による協同解釈」の2つのサブカテゴリーであった。

「ABC記録法」は、「実態把握」、「援助」、「振り返り」の3つのカテゴリーに分類された。それが、さらに6つのサブカテゴリーに分類された。「実態把握」のカテゴリーは、「子どもの行動理解」の1つのサブカテゴリーであった。「援助」のカテゴリーは、「集団適応への支援」「援助方法の統一」「保育環境資源の相違による活用」「子育て相談」の4つのサブカテゴリーであった。「振り返り」のカテゴリーは、「客観的視点による力量形成」の1つのサブカテゴリーであった。

表3に双方の記録におけるSCATで抽出した構成概念とそれを集約したカテゴリー、サブカテゴリーを示した。

表3 双方の記録の構成概念による比較

学びの物語			ABC記録法		
カテゴリー	サブカテゴリー	構成概念	カテゴリー	サブカテゴリー	構成概念
I. 実態把握	1. 子どもの意欲・内面の理解	主体性に対する細かな見取り、視線や目線からの子ども理解、子どもの内面と意思の理解、興味関心を捉える視点、気持ちの表れを捉える視点	I. 実態把握	1. 子どもの行動理解	パターン化している行動、回数が測定できる行動課題となっている行動、肯定的な行動へのまなざし
	2. 子どもの姿の焦点化	明確な視点による子ども理解、曖昧で不確実な姿からの捉え、個人の見方の尊重、明確な視点による子ども理解		1. 集団適応への支援	集団適応の支援を重視、一斉保育による活用、援助方法の検討、感覚の過敏性、課題解決の糸口、特性の把握
	3. 限定されない場面や行動	特定の行動にとらわれない子どもの姿、場面にとらわれない子ども理解、場面にとらわれない子どもの見方		2. 援助方法の統一	協働による多面的理解、協働による意思統一、保育者間の連携、保育者の情緒的支援、情報共有による信頼関係
II. 援助	1. 個と集団の育ち	個に応じた育ちの尊重、仲間関係の援助、個の発達を重視、個と集団の育ちの尊重、適応支援の視点、仲間関係を捉える視点	II. 援助	3. 保育環境資源の相違による活用	低年齢児の行動、発達年齢による行動の違い、環境移行に伴う行動範囲、低年齢児の保育、低年齢児の行動理解、複数職員で活用
	2. 子育て支援	子育て支援への活用、連絡帳への活用		4. 子育て相談	子育て相談として活用、保護者との共有
III. 振り返り	1. 主体的な力量形成	具体的な思考を促す記録、若手保育者の振り返りと力量形成、自己評価の視覚化、保育実践の意味の問い直し、新たな見方による力量形成、子育て支援を行う保育者の力量	III. 振り返り	1. 客観的視点による力量形成	客観視による力量形成、省察の手段、若手保育者の力量形成、視覚化記録による課題解決
	2. 対話による協同解釈	対話と交流による経験知の伝達、対話での情報共有、対話による保育観の共有、価値観、子ども観の共有、対話による同僚の成長			

IV. 考 察

保育者の主題に対するストーリー・ラインによる構成概念のカテゴリーから、「学びの物語」と「ABC記録法」の双方の記録に対する意識が明らかとなった。以下、相違点と共通点から、障害児保育における記録の在り方について考察を行った。

保育者は、双方の記録について「実態把握」、「援助」のカテゴリーに大きな違いがあると捉えていることが示唆された。上記のカテゴリーにおいて、「学びの物語」は、「子どもの意欲・内面の理解」「子どもの姿の焦点化」「限定されない場面や行動」「個と集団の育ち」といったサブカテゴリーが抽出されたのに対し、「ABC記録法」は「子どもの行動理解」「集団適応への支援」「援助方法の統一」「保育環境資源の相違による活用」といったサブカテゴリーが抽出された。

「学びの物語」は、「できる/できない」といった二項対立的なまなざしではなく、子どもが主体となって遊びや仲間関係の充実を目指した実践が行われてきた³⁾。そして、子どもは、有能であり、学び手であり、子どもが進んでやろうとする構えが前景化され、子どもの否定的な要素を見るのではなく、肯定的な側面に焦点があてられる¹¹⁾。本研究の結果からも、保育者は「学びの物語」を子どもの内面や意欲を尊重し、子どもの主体性と仲間関係による協同性といった、学びの過程を把握するために有効な記録として捉えていたと言える。

一方、「ABC記録法」は、子どもの課題となる行動や場面について、子どもの行動上の問題や保育実践の課題を多面的に捉えることが可能であると考えられていた。また、「保育環境資源の相違による活用」のサブカテゴリーは、人的資源が整備されることで「ABC記録法」の活用が可能になると捉えられていた。

応用行動分析学では、保育者の援助技術の改善や向上⁵⁾、他の保育者への波及効果⁶⁾が示されており、子どもの行動上の問題に対する援助の方法、環境的条件の見直し、個に応じた合理的配慮を検討するために有効である。保育者の意識からも「ABC記録法」は、子どもの課題に対して、場面に適した具体的な行動の目標を見い出せる記録であること。そして、障害のある子どもが快適に生活するための人的・環境的配慮、情緒的に安定して過ごすための保育者の援助を検討するために必要な記録として捉えていたと言える。

他方、保育者は、双方の記録に2つの共通点を見出していることが示された。1つ目は、「援助」のカテゴリーの「子育て支援」、「子育て相談」のサブカテゴリーであ

る。「学びの物語」では「子育て支援への活用」のサブカテゴリーが抽出され、「ABC記録法」では「子育て相談への活用」のサブカテゴリーが抽出された。「学びの物語」は、写真を用いて可視化することや関心をもって環境にかかわっている子どもの姿を物語として綴ることとなる。保育所保育指針解説⁴⁾では、保護者の相互理解を図るため、保護者の子育てに対する自信や意欲を支えることや、保育活動に対する保護者の積極的な参加を促すことが求められている。「学びの物語」は、子どもの育ちや発達の姿を視覚的な記録として蓄積する。保育者の意識からも、このような視覚的な情報は、他者と共有できる利点があり、保護者に保育・教育の内容を伝える手段として有効であり、保育者固有の子育て支援に寄与する記録であると言える。

一方、「ABC記録法」は、主に子どもの気になる行動や養育上の課題に対する保護者からの相談に対して活用できると捉えられていた。応用行動分析学では、これまでも養育者の養育技術の向上や子育てストレスの軽減といった効果¹²⁾が示されており、保護者に対する相談支援に活用できる記録であると言える。

2つ目は、「振り返り」のカテゴリーに示された保育者の力量形成への活用である。「学びの物語」では、「振り返り」のカテゴリーにおいて「主体的な力量形成」「対話による協同解釈」がサブカテゴリーとして抽出された。「学びの物語」は、子どもの姿をもとに保育者同士の対話が進められ、保育者双方の思考の伝え合い、そして、保育を振り返ることは保育者個人の成長を促すと捉えられていた。また、同僚との対話は、保育者双方の経験知、保育観の共有と伝達に役立つと捉えられていた。保育の質の向上・確保の手段として、保育実践の「見える化」が必要であることが示されている¹³⁾。このように「学びの物語」による1次的な記録は、個人の省察と同僚との対話を経て、子どもの見方を振り返ることから、自身の保育を見直すことに活用できるであろう。

一方、「ABC記録法」では、「振り返り」のカテゴリーにおいて「客観的視点による力量形成」がサブカテゴリーとして抽出された。客観的視点による事実情報の記録は、自らの援助の在り方を振り返ること、情報を共有、連携、協働といった保育者同士の一体的な対応を産出する記録であるとの意識が明らかとなった。保育場面で示す子どもの行動は多種多様であり、行動の原因理解とそれに対する援助は、保育者が協働して検討することとなる。これまでも、「ABC記録法」は子どもの支援の発見と支援のための保育者間の伝達を促進することが示唆されている⁸⁾。

上記のプロセスを視覚化する作業は、保育者間の保育に対する一体的な対応を可能にするものであると考えられる。このことから、子どもの気になる行動は、障害が起因して起きると捉えるのではなく、人的・物的環境の再構成を含めた視点に着眼し、保育者同士で援助の在り方を見直すために必要な記録であると考えられる。

V. 結 論

本研究は、「学びの物語」と「ABC記録法」に対する保育者の意識を明らかにした。「学びの物語」の記録は、子どもの主体的な遊び、子ども同士の協同的な学びの過程を把握するために有効な記録であると捉えられていた。一方、「ABC記録法」による客観的な子どもの捉えは、子どもが情緒的に安定し、興味・関心のある遊びを提供するために前提となる環境の見直し、合理的配慮を検討することができるかと捉えられていた。また、双方ともに障害のある子どもへの援助に対する保育者の力量形成、子育て支援や子育て相談に活用可能であることが明らかとなった。

一方、本研究の限界点は、対象者の双方の記録に対する実践経験の有無の差が結果に反映されている可能性があることである。本研究のすべての対象者は、「ABC記録法」の講義と実践経験を有しており、「学びの物語」については、実践経験をもっていなかった。このことから、今後は、実践を通じた学びにより、研究データを積み重ねる必要がある。そして、本研究で得られた知見を踏まえ、障害のある子どもを包括的に捉え、かつ、幼児期の学びに適合した具体的な記録の様式を作成し、子ども理解のための記録の在り方を検討していく必要がある。

謝 辞

本研究への主旨をご理解し、快くご協力いただきました保育者の皆様に心より感謝申し上げます。

本研究は、利益相反に関する開示事項はありません。

本研究は平成31年度 新潟青陵大学（学部）共同研究費（学術研究）の助成により実施いたしました。

文 献

- 1) 吉川和幸：私立幼稚園に在籍する特別な支援を要する幼児の個別の指導計画に記述された「目標」に関する研究。北海道大学大学院教育学研究院紀要，2014；23-43。
- 2) 松井剛太他：保育者は障害児保育の経験をどのように意味づけているのか。保育学研究，2015；53-1：66-77。
- 3) 吉川和幸他：「信頼モデル」による記録。評価は障害児保育実践をどう変えるのか—「学びの物語」作成による半年間の保育実践からの検討—。保育学研究，2017；55-1：55-67。
- 4) 厚生労働省：保育所保育指針解説。東京：フレーベル館，2018。
- 5) 田中善大他：応用行動分析の研修プログラムが主任保育士の発達障害児への支援行動に及ぼす効果の検討。行動科学，2011；49-2：107-113。
- 6) 松崎敦子他：保育士の発達支援技術向上のための研修プログラムの開発と評価。特殊教育学研究，2015；52-5：359-368。
- 7) ジョン・O・クーパー他，（中野良顯訳）：応用行動分析学。東京：明石書店，2013。
- 8) 田中善大：認定こども園における支援を“発見し”“伝える”ための応用行動分析に基づく記録の実践。大阪樟蔭女子大学研究紀要，2019；9：253-262。
- 9) 大谷尚：4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案—着しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—。名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学），2008；54-2：27-44。
- 10) 大谷尚：SCAT：Steps for Coding and Theorization—明示的手続きで着しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法—。感性工学，2011；10-3：155-160。
- 11) マーガレット・カー，（大宮勇雄他訳）：保育の場で子どもの学びをアセスメントする—「学びの物語」アプローチの理論と実践—。東京：ひとなる書房，2013。
- 12) 齊藤 勇紀：ことばの遅れと気になる行動を示す幼児に対する機能的アセスメントに基づく子育て相談の効果—養育者と支援者の「協働」によるアプローチの検討。2019；保育と保健，25-2：39-43。
- 13) 大豆生田啓友他：わが国におけるドキュメンテーションの可能性に関する一考察。子ども学，2019；7：125-140。